

龍 灯

第 1 号

発行所 大阪市史跡 龍溪禪師墓所
 霊亀山 九島禪院
 〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
 ☎06-583-2725
 発行人 住職 奥田啓知(智證)

脳死と仏教

静かに死なせてほしい

仏教では、私の寿命には限りがないから、無量寿といえます。ひとは定命(じょうみやう)で量が定まっています。寿(じゅいのち) 湊(なん) 体温(じゅ(じき) 意識) といひ、死にのぞむと、湊・識が肉体を離れ、寿が尽きるのだそうです。

一方、医学では、心臓が止まったとき(心臓死)に、脳も自然と活動を停止し死亡に至るとされています。昨今、「脳死」といって、心臓は動いているのに脳が活動を停止し、脳が永久に機能を失った状態(不可逆的機能消失)をもって死と認定しようという動きがあります。いわゆる「脳死」に関する論議ですが、「脳死」の問題を手掛かりに仏教の考え方、仏教のあり方を考えてみたいと思います。

読売新聞の日曜版に「まんだら人生論」(ひろさちあ著)に次のような記事がありました。

四人の男が旅をしていた。道にライオンの骨が散らばっている。一人の男が骨を拾い集めてライオンの骨格を作り上げた。

「次は、おれ様の出番だ」と、もう一人の男がそのライオンに肉をつけ、皮を着せた。「さてそれでは、わしはこのライオンに命を吹き込んでやろう」と、第三の男が言った。第四の男は第三の男をいさめる。そんな馬鹿なことをしてはいけない。

しかし、彼は耳をかそうとしな。あわてて、第四の男は高い木の上に登った。第三の男が、ライオンに生命を吹き込んだ。生き返ったライオンは、三人の男たちを食ってしまった。第四

の男だけが、木の上で難をまぬがれた。



この話の三人の男は「科学技術」を象徴し、第四の男が「宗教」を象徴しているように思うのです。宗教を欠いた科学技術の独走は、ときには恐ろしい結果をまねいてしまう。そんなことを、この話は教えているように思えるのです。

例えば、臓器移植です。「脳死」を認めることによって、心臓と肝臓の移植が可能になり、多くの人命が救われる。そのこと自体はたいへん喜ばしいことですが、臓器移植をするためには、「脳死」を認めてまだ呼吸をしている人間を「死者」とし

なければなりません。未来書が予言するように、臓器移植のすすんだ二十一世紀には生命維持装置につながれた「脳死」の死体置き場から、金持ちの患者が現れると、置き場から次々に臓器を切り取っていくというような事態にならないとは、断言できないのではないのでしょうかそうした科学技術の暴走(ばくそう)をとめるのが、宗教ではないでしょうか。

いま論議されている脳死の問題は、前述のライオンの話でいえば、第三の段階なので

第一の段階は輸血。第二の段階は、腎臓移植と角膜移植にあたるのではないのでしょうか。ここまでは、誰もが是認するところだと思えます。第三の段階は心臓移植や肝臓移植で、それらの移植には、できるだけ新鮮な臓器が必要なので、死体から摘出した心臓や肝臓では、役に立たないのです。できるだけ新鮮な臓器を得るためには、少しでも「死」の判定を早めよう、そこ

で「脳死」の問題がでてきたのです。

「脳死」とは、心臓が動いているのに、脳が活動を停止している状態をいいます。たとえ心臓が動いていても、脳が死んでしまったのだから、「死」と認めよというのです。このような「脳死」状態になっても、人工呼吸器をつけておくと、心臓は動き、体温もあるわけです。だから、完全な意味では、死んでいないのです。近親者にすれば「心臓が動いているのに、死んだと言われてもすんなりとは受け取れない」と思って当然ではないでしょうか。

仏教的に考えると、どうなるのでしょうか。仏教では、生・老・病・死を「苦」だと教えています。この場合の「苦」だというのは、苦と楽が相対的にあるような苦ではなく、絶対的な「苦」そのものなのです。どうしても楽に転ずることのない「苦」。それが生・老・病・死の「苦」なのです。そうした、生・老・病・死

が人間の「苦」であるかぎりわたしたちは、不老・不病・不死を求めてはいけなないので

いつまでも若くありたい。病気になるたくない。

死にたくない。そのような願いは、仏教的には執着(しゅうじゃく)です。仏教ではむしろ、生・老・病・死を静かに受容するようにと教えています。

良寛禅師のことばに

「しかし、災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是ハこれ災難をのがるる妙法にて候」

というのがあります。病気になるれば病気になるべし。死ぬときは死ぬべし。仏教が教えているのは、いい意味での「あきらめ」です。臓器移植を受けることによって救われるかもしれない患者には、酷な言いかたかもしれないが、臓器移植の技術が開発されていかなかった昔には心不全患者はあきらめざるを得なかったのです。技術の進歩が逆

に人間をあきらめにくくさせています。人間は、いつか死ぬのです。死を一寸延ばしにすることが、本当の解決ではありません。

それよりも怖ろしいのは、「脳死」を認めると、次には別の問題がでてきます。それこそ、未来書にいうような、臓器を取るために脳死の遺体置き場が出現するようにならないとは、誰が言えるでしょうか。

人間の「死」を弄(もてあそ)ぼうとする現代医学に、言いたい。

「愚かなことをしてはいけません。すべての人を静かに死なせてあげるべきだ」と。

龍燈と題して

本誌の題名「龍燈」は、弊師弘忠禅師が昭和三十五年から同四十五年にかけて、発行していた寺報に因んで命名しました。

不肖も昭和六十二年より平成元年にかけて、仲間の青年僧とともに「さちあ」という

檀信徒の

皆さまへ



○当院墓地使用者へ

当院墓地管理規則・管理費規定の改制定の件についてはご賛同を頂き、誠に有り難うございました。早速、多くの方から、「誓約書」および「墓地使用申込書」をご返送頂いております。まだの方は、年末の墓参時にでも、当院にお届け下さい。

○新墓碑建立希望者へ

この度、以前から墓地の改葬により、ご返還された墓地を整理しました。新しく墓碑建立希望者に提供致したく、すでに区画工事も竣工致しましたので、詳細は、当院までお問い合わせ下さい。

○当院責任役員（総代）

宗教法人「九島院」の寺院規則により、当院の責任役員および総代は左記のように決定しましたので、ご了承下さい。なお、当院寺院規則の一部要略をかかげておきます。

☆この法人は五人の責任役員置き、そのうち一人を代表役員とする。

役名	別称	氏名	住所
責任役員	総代	戸谷良太郎	西区九条南三一六〇一
責任役員	総代	浜田文夫	西区九条一一一九一十二
責任役員	総代	酒向正和	西区九条南三一四一八
責任役員	総代	佐古口比佐志	港区夕風一一七一五
総代	世話人	尾崎高志	西区九条南二二一二十五

員とする。
 ☆代表役員は宗制による寺院住職充て管長が任命する。
 ☆代表役員以外の責任役員は檀信徒の内から住職が選定する。
 ☆代表役員の任期は任職の在任中。代表役員以外の責任役員の任期は五年とする。但し再任は妨げない。

○年始の月参りについて

このたび、住職に専念する為、大阪市立西第二商業高等学校を来三月に退職いたしました。十六年教鞭をとっておりましたので、気分一新も兼ね家内とヨーロッパへ、修学旅行

機関紙を発行してまいりましたが、この度、九島院第二十五世の法脈を引き継ぎ、開山特賜太宗正統禪師龍溪大和尚から連綿と継がれた法脈を微光ながらも、絶やすことなく燈しつづける決意でいます。

「真理は永遠の娘」であり、また、仏教教義も変わるものではありません。しかし、有為転変の世の中、仏教も時代に依じてその説き方も順じていかねばなりません。現代に生きる私も、現代的な眼を開いて考えていかねばなりません。

浅学非才の小生の書くものですので、世の秀れた方ものに比すれば全くとるに足らぬ紙屑かもしれませんが、何か役にたればと願っているわけですので。ご意見・ご投稿を歓迎いたします。

行？に出掛けます。大晦日より一月九日の旅程です。旅行旅行中、月参りその他でご迷惑をお掛けいたすと存じますが、ご寛容の程宜しくお願ひします

年忌について

来年分の年忌表をかかげます。一周忌とか三回忌の仏さまは亡くなって間がないので、皆さまの方がよく御存知のことと思いますが、古い仏さまの場合、今年あたり多分、年忌にあたるのではとのお問い合わせがあります。

当院の住職が葬儀を執行致しました場合はすべて当院の過去帳に記入しており、年末に調査してお知らせ致しますが、他寺に於いて執行されたものに関しては、未だ全部把握できておりません。

小生も参詣致しました折よく気をつけておりますが、左表によりご注意ください。当院も百年以後の過去帳のみ戦災で焼失を免れましたが、水禍のため一部不鮮明のところがあります。

なお、二十三回忌・二十七回忌三十七回忌・四十三回忌・四十七回忌などは、禅宗や当地域にては執行致しません。ご了承下さい。

年忌表 (平成2年)

回 忌	死 亡 年
1 周忌	平成 1 年
3 回忌	昭和 6 3 年
7 回忌	昭和 5 9 年
1 3 回忌	昭和 5 3 年
1 7 回忌	昭和 4 9 年
2 5 回忌	昭和 4 1 年
3 3 回忌	昭和 3 3 年
5 0 回忌	昭和 1 6 年

仏教テレフォン相談室

—— せいせいご利用を ——

欧米諸国では「ダイヤルフレンド」という自殺を予防するための電話相談のシステムがあり、キリスト教の隣人愛

の精神で、ボランティア活動が活発に行われています。仏教界でも、遅ればせながら「仏教テレホン相談」が、

昨今、なされるようになってきました。大阪でも、下記のように各宗派の青年僧が集まり「大阪



仏教テレホン相談室」が開設されています。せいせいご利用下さい。尚、私たちの宗派（禅宗）の当番は木曜日です。

〔編集後記〕

本当に長く、そして、あっとい間に過ぎ去った一年でした。正月の家族旅行で山陰に行った折「のんびりしたよい正月だね」と妻に話していたのとは裏腹に激動の一年を過ごすことになってしまいました。お月参りのお家の確認、住職交代の挨拶状の発送、春の彼岸法要、お盆の棚経参り、施餓鬼法要、境内墓地の改革など法務もなんとか無事にこなすことができました。一方、転勤以来、慣れない夜間高校での勤務、「過労死」もせず、こうして一年を終えようとしています。これも、ご本尊様をはじめ、有縁無縁の皆様方の温かいご援助の賜物と本当に感謝しております。まだまだ、未熟者で、ご迷惑をおかけしていることと存じますが、九島禅院発展の為に精進したいと思っております。

— 仏事、信仰、人生相談 —
大阪仏教テレホン相談室

TEL (06) 245-5110
ゴゴの110番
月曜日～土曜日 午後2時～5時 (祝日を除く)

浄土宗・融通念仏宗・浄土真宗・真言宗・天台宗
臨濟宗・曹洞宗・黄檗宗・日蓮宗
以上10宗派の僧侶が相談をお受けします。